

文栄堂の出版環境

磯 部 敦

要 旨 京都大学附属図書館に、京都の本屋「文栄堂」の一次史料が収蔵されている。そのなかの一冊『新本売買明細帳』には、仕入れ、卸し、小売りの実態が事細かに記録されている。本屋は本をどこで、いくらずで仕入れ、どこに、いくらずで卸していたのだろうか。あるいは、誰にいくらずで売っていたのだろうか。本稿では、営業文書の分析をおして、文栄堂における出版環境の実態を報告する。

はじめに

京都大学附属図書館に、京都の仏書屋「文栄堂」（法文館、主は沢田友五郎）の内部史料が収蔵されている。『京都書籍出版文書』と題されたその文書は、『新版彫刻控』、『新本売買明細帳』甲乙、『入銀帳』などの計一三点で構成される。前稿「説教学全書の製作費用——明治二〇年代後半、京都の本屋〈文栄堂〉の史料から——」⁽¹⁾では、明治二一年二月から明治三二年一月までの版權登録願や制作費用の見積もりなどを記録した『新版彫刻控』をとりあげ、その分析をとおして書籍の製産現場の実態を報告した。本稿では、文栄堂の仕入れや卸、小売りを記録した『新本売買明細帳』甲乙号を分析対象とし、文栄堂における出版環境の実態を報告する。

いま「出版」という営為を「製産」「流通」「享受」の三要素に分けるならば、本稿の射程は「流通」に定められている。狭義の出版事業だけで本屋経営が成り立つはずなどなく、だとすれば、書籍をやりくりする「流通」にこそ経営の屋台骨というべきものがある。書籍をどこからいくらでどのように仕入れ、どこにいくらで卸し、あるいは誰にいくらで売ったのか。書籍そのものにはあらわれないゆえにもっとも解明しにくく、けれども当たり前を抱くであろう疑問について、『新本売買明細帳』は詳細に語ってくれるだろう。⁽²⁾

なお文栄堂の来歴、および『京都書籍出版文書』の内訳と内容については前稿で述べてあるので、あわせて参照していただきたい。

1 品揃え

1・1 規模

まずは、『新本売買明細帳』甲一号・同甲二号・同乙二号の性質を考えるとところから始めることにしたい。

『明細帳』は甲乙二号に分けられており、甲号が自家蔵版書籍の卸小売記録、乙号は他肆から仕入れた書籍の卸小売記録となっている。さしあたって一例をあげてみよう。

【甲号】『伝通縁起講義』

辰 七月二十九日 越中学海堂 十部

【乙号】『冠導俱舍論』

辰一〇月一日 岩瀬様 一部 見白テルメ

甲号が「卸／小売日・相手・部数」を記録するのに対して、乙号は「卸／小売日・相手・部数・卸値」という記録のとり方に違いがあるけれど、これは自家蔵版書籍の卸や小売については別に通い帳が存したことからくる差異であろう。ただし『京都書籍出版文書』のなかに、この時期の通い帳はみあたらない。

『明細帳』の採録期間は、甲一号が明治二十四年一〇月から明治二十六年六月まで、甲二号が明治二十六年七月から明治三十一年七月頃まで、乙一号が明治二十五年から明治三十二年頃までとなっている。ところで、『明細帳』各記録末尾に

「巳六上」「巳六合上」「巳六済」といった朱印が押捺されているが、これは、明治二六年六月に棚卸しがあったことを示すものである。「済」は捌ききったことを、「合」は帳簿と残部が合致したことを、「上」は甲二号に帳簿記録を移したことをあらわしているのだろう。また、在庫と帳簿が合致していなかったばあいは、各記録の冒頭に「何部不足」と記すことになっていたようである。この明治二六年六月に行われた棚卸しの記録をもとに文栄堂の品揃えを再現してみると、このとき文栄堂には一三六二点・一五二八六部の書籍類があったことがわかる。これに蔵版書籍の板本や紙型も保持していたと考えれば結構な量になると思われるのだが、これは、相対的にどの程度の規模であったのだろうか。

書肆の営業規模を推しはかる指標のひとつに、所得納税額がある。⁽³⁾ 直接に比較検討する他肆の一次史料はみあたらないので、本稿でもこの方法から考えてみようと思うのだが、課税対象額がすべて「書籍」によるものであったかどうかまで判然としないという方法的限界があることには留意しておかねばならない。

さて、明治三〇・三一年度調査の所得税納税額を掲載する『日本全国商工人名録』⁽⁴⁾ には京都の書籍商が一五肆列記されているが、これを多額納税順に掲げみると次のようになる。

藤井孫兵衛 二八四九六錢六厘

東枝吉兵衛 八四九二錢

村上勘兵衛 八四二六錢

藤井佐兵衛 七四一一錢

今井太郎右衛門 七四 七錢

田中治兵衛	六円八二銭
出雲寺文次郎	六円二七銭
大谷仁兵衛	四円九七銭
永田長右衛門	四円四二銭
西村七兵衛	四円二五銭
西村九郎右衛門	四円
沢田友五郎	三円九四銭
福井源次郎	三円九一銭
桂うの	三円七五銭
細川清助	三円四二銭

「桂うの」の素性は不明であるが、明治一〇年に津逮堂吉野屋大谷仁兵衛より独立開業した開益堂細川清助⁽⁵⁾のほか、いずれも江戸時代以来つづいている書籍商である。文栄堂の課税対象額は三九四円で、所得税額順にみれば一五肆のうち一二番目という低位ではあるが、京都にあまた存在する本屋のなかで所得税三円九四銭を納めるだけの営業規模をもち、文昌堂永田調兵衛から分家したという血統ともあいまった家格と信用はあったかと思われる。また、「姻戚関係や師弟関係でのつながりが強く」残っているという「仏教書の出版社」たちの関係性は、仏書の需要供給網を安定させる一因となっており、それがまた自家の営みを永続させることにつながっていくのである⁽⁶⁾。

1・2 分類

本節では、明治二六年六月の棚卸しに戻り、一三五九点・一五二八六部の書籍群の内訳についてみていくことにしたい。

『明細帳』各号の版心には朱紙付箋が貼付されていて、そこに分類項目が墨書されている。まずは甲一号の分類からみていくが、各分類の下に、明治二六年六月棚卸し時点での残存点数を記しておく。

小本之部	一二二点
半紙本之部	六九点
大本之部	一七〇点
真宗勸行並ニ折経之部	五〇点
活版物ノ部	一点
儒書之部	二八点
郵券出入扣	

甲二号では「戻り本之部」が増設され、「郵券出入扣」も「式錢券出入扣」「三錢券出入扣」「壹錢券出入扣」「五厘券出入扣」と細分化されている以外はまったくおなじ項目である。「儒書之部」に列記されているのは二八点。『文久廿六家絶句』『近世名家詩鈔』のような漢詩文類、『大学』『中庸』『蒙求經典余師』から『万々雜書三世相』『俳諧季寄鑑』など、仏書以外の書籍が列記されている。ほとんどが江戸時代後期、沢田友七郎時代の刊行物である。友五郎

の代になって仏書出版に集中していった様子が、ここからうかがえよう。

仏書では、他宗派との共通テキストなどは相合で出版に関与している形跡がみうけられるが、圧倒的に多いのは真宗関係の書籍であろう。明治一〇年代には東本願寺の御用書肆に指定されており、また本山教育課蔵版書籍の売り捌きも担当するなど、真宗大谷派との繋がりは文栄堂の営為に大きく関わってくるものであった。

さて、対する乙号の分類は次のようなものである。甲号と同様、棚卸し時点での残存点数を明記しておく。

仏書／大本之部	八八点
仏書／半紙本之部	八一点
仏書／小本之部	八七点
一枚摺図之部	四点
仏書／活版洋本之部	八五点
在家勸行及御経	九二点
仏書預物	九三点
教育課蔵版物	六点
漢学之部	五三点
字類之部	一四点
画引以呂波引及紋帳	四二点
記事論説／用文章	三二点

画手本之部	七点
詩作之部	二一点
和歌俳諧冠句	五一点
立花生花部	六 点
圍碁将碁	一〇点
易書及雜書	三 五点
大工雛形之部	九 点
図及名所道中記	二六 点
小説及雜書ノ洋本	三七 点
往来物ノ百人一首ノ女大学	四 点
英書ノ部	一 点
雜書	三五 点

浄土宗や曹洞宗などの書籍も若干数取り扱っているが、仏書の中核をなしているのは、やはり真宗関係の書籍である。項目は書型別。確かに仏書のばあい、和讃や御文などは小本、起信論などのテキストや注釈書類は半紙本や大本といったぐあいに書型ではば大別することは可能である。文栄堂の書籍目録としては、明治二六年一月『活版蔵版発売書籍目録』があるようだが、筆者未見のため当該文書の項目比較はなしえない。ちなみに時代はくだるけれども、明治四四年四月改正『法文館図書目録』における分類項目は、「蔵版書籍目録」と「発売書籍目録」に大別したうえ

で、下位分類として「俱舎之部／唯識之部／三論之部／因明之部／華嚴之部／天台之部／真言之部／禪宗之部／浄土之部／真宗之部／説教法話之部／真宗勤行之部／御経過去帖之部／雜部／普通書之部」が設けられている。

1・3 品揃え

先ほどの分類項目で明らかなように、文栄堂の取り扱い書籍は仏書だけではなく、漢籍に和歌俳諧、往来物に小説囲碁将棋と広範なジャンルに及んでいた。点数で目につくのは、「漢字之部」五三点、「和歌俳諧冠句」五一点、「画引以呂波引及紋帳」四二点、「小説及雜書ノ洋本」三七点、「易書及雜書」三五点、「雜書」三五点、「記事論説／用文章」三二点、「図及名所道中記」二六点といったあたりだろうか。

「漢字之部」に列記されているのは、『国史略』、『日本外史』、『文章軌範』、『十八史略』など漢文で記されたもの。だいたい一部から三部ずつほどしか仕入れておらず、売り上げも一年に一部といったところ。そのなかで『明治国史略』や川越版『日本外史』、岡本仙助版『四書講義』や『十八史略講義』などは、月に一、二部ずつ売れており、仕入れも頻繁に行っている。この時期においてもテキストとしての需要は多かったようだ。

「和歌俳諧冠句」には、文字どおりの書籍類が列記されているが、部数じたいは少なく、いずれも一部から三部とあったところである。この項目には他に『万葉集』や『古今和歌集』などの歌集、それに関連してのことであろう、『竹取物語』や『伊勢物語』、『十六夜日記』なども列記されている。『土佐日記』や『徒然草』に関しては、本文だけでなく注釈書も取り揃えている。ほとんどが店売りで、購買者の詳細は明らかではない。

「画引以呂波引及紋帳」に列記されている紋帳は数点のみで、ほとんどが「画引」「以呂波引」の節用集や字書の類。これもまたいろんな種類を数点ずつ仕入れている。こうした傾向は「易書及雜書」「記事論説／用文章」などにおい

でも指摘できる。いま人気のある書籍を大量に仕入れるのではなく、何年経っても確実に売れる商品を少数仕入れ、時間をかけながらも全部売り切るという傾向があるようだ。

「小説及雑書ノ洋本」に列記されている『真田三代記』『大岡政談』『絵本西遊記』などはボール表紙の洋装本かと思われるが、一部ずつしか仕入れておらず、また売り捌いたあと仕入れた形跡もみられない。一方、『親鸞一代記』や『日蓮上人一代記』は一〇部以上仕入れており、売り捌いたあとでも本市などで仕入れている。おなじ翻刻本でも仏教に関係してくる読み物には重点を置いていたようだ。講談速記本や小説については個別タイトルがみあたらず、『小説色々』『半紙形小説色々』『切付小説小形』などと記されている。その内実は不明だが、講談速記本などはここに一括管理されていたかと思しい。一括管理といえ、ほかに「寸珍切附絵本」「寸珍絵本 内藤版」という項目もみられ、これまたその内実は不明だけれど、これらは明治一〇年代中ごろから盛んに刊行される銅版草双紙のことであろう。京都では明治二〇年代、内藤彦太郎が整板・銅版の豆本をたくさん刊行しており、それらをひくくめて「内藤版」と称していたか。⁽⁸⁾こうした子ども向け絵本のほかに、軍歌、美談集や立志伝などの書籍も五部ずつほど揃えている。

出版事業を仏書に限り、そのほかの書籍は仕入れでまかなおうとしているが、もちろん何でもかんでも仕入れているわけではない。

まず、錦絵や新聞雑誌の類はない。「一枚摺図之部」に分類されているのは『極楽道中双六』『仏法双六』のような仏教関係のものだし、雑誌としては『法話金言録』の一五〜一七号が乙号「仏書小本之部」にみられるほか、真宗系の仏教雑誌『日本一』が乙号「仏書預物」の下位分類「共益義会 日本一」に、『日清戦争実記』八編から二八編が「雑書」に列記されているのみである。

教科書については、一般の書籍とは異なって「区域制限之一手専売契約」という独自の供給網が存在していたとする稲岡勝「明治検定教科書の供給網と金港堂——『小林家文書（布屋文庫）』の特約販売契約書——」⁽⁹⁾の指摘が説明している。ここでいう教科書とは一般の学校で用いられるテキストをさすのだが、仏教系の学校で用いるテキストについていえば文栄堂は出版も仕入もおこなっていたようで、浄土宗学校で用いられていた修身教科書『文苑説林』を明田嘉七・永田長左衛門・沢田友五郎・村上勘兵衛・田中治兵衛の五肆相合で出版している。⁽¹⁰⁾また、『明細帳』乙号の分類にみられる「教育課蔵出版物」とは、京都府教育課ではなく真宗本山教育課のことで、文栄堂はその売り捌きを担当している。⁽¹¹⁾

専門書もみかけないが、たとえば医学書のばあい、定価販売が同盟規約で取り決められており、それゆえ卸正味も高値にならざるをえないこと、そして非同盟員にもこれが徹底されていたという事情もあったことに拠っている。⁽¹²⁾法学書、経済書、農学書の類や、いわゆる文学書がみあたらないのも、購買者が限定されるという事情に拠るものだろう。『刑事治罪法註釈』や『刑事訴訟法註釈』などは「小説及雑書ノ洋本」に分類されているが、『現行書式全書』などとともに実用書として揃えたものかと思われる。

如上、娯楽書や往来物など仏書以外の書籍も多く取り揃えてはいるが、文栄堂のメインは、やはり真宗を中心に据えた仏書である。『八宗綱要』などのテキスト類をはじめ、和讃や勤行集といった実用書などの仕入・在庫が大部になっているのは、これらに安定した需要が見込めるためであった。教義がころころと変わるはずもなく、仕入れたテキストを長い期間をかけて売りさばいているのも、同様の理由に拠ろう。明治二〇年代以降、盛んに行われていた説教演説の関係書も積極的に仕入れており、新しい動きにも目を配っていた様子がうかがえる。次節以下においては、どのような方法で如上の書籍類を仕入れていたのかについて考察を加えていこうと思う。

2 仕入れ

2・1 符牒と仕入値

『新本売買明細帳』乙号における仕入れ・売買価格には符牒が用いられているのだが、筆者が計算したところによれば、符牒の内実は次のようになるかと思う。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・円・銭・厘
シ・ム・見・セ・テ・ウ・リ・マ・サ・ル・白・メ・ト

この符牒を、たとえば『明細帳』乙一号にみえる『唯識大意発揮』（仏書／半紙本之部）にあてはめてみる。

唯識大意発揮（定価四〇銭）

明治二六年	三月一四日	沢吉	一部	ムルウメ	（二六銭）
	一月二〇日	円琳寺	一部	見ルメ	（三〇銭）
	二月七日	店	一部	見ルメ	（三〇銭）

『唯識大意発揮』は明治一九年四月、文昌堂永田長左衛門から刊行された仏書で、小山憲栄著。定価は四〇銭で、

再刷りなどの異板については未見である。『唯識大意發揮』の入手経路については「巳二月廿二日交換会 下卯ヨリ入 ムルメ替」、すなわち明治二六年二月二三日開催の交換会において下卯（下村卯之助）より一部二〇銭で入手したもので、店売りのばあいには三〇銭、沢吉（沢田吉左衛門）には二六銭で卸している。「ムルメ替」とあるのは、二〇銭分の書籍と交換したことをあらわしているかと思われる。

2・2 交換会と本市

右『唯識大意發揮』は交換会で入手しているが、交換会については次のような指摘がそなわる。

明治二六年一月二五日、書籍商交換会が初めて祇園牡丹畑で開かれ、七平（磯部注 丁子屋西村七平）は会主、下村卯之助を補佐した。この会は恒例となり、現在も「仏書交換会」略して「仏交会」の名で続けられている。⁽¹³⁾

後述するように、交換会では「仏書」のみが取引対象であったが、その他の書籍は本市で仕入れていたようだ。たとえば、明治二六年二月一六日から一八日に開催された大谷仁兵衛主催の本市における入手書籍は、『大阪版寸珍絵本』一〇〇部、『鳩翁道話』『小説色々』各二〇部、『仏教新演説』『帝国実業新用文』『小倉百人一首』各一〇部、『発句一万集』六部など計二八八部にのぼる。うち『徒然草増註』五部については「替」とあるので、本替で入手しているかと思われる。

ところで右引用文に拠れば、仏書交換会は明治二六年一月に初めておこなわれたことになっているが、『明細帳』を繰っていけば、もっと前から交換会が開催されていたことがわかる。試みに、甲一号（明治二四年一〇月）明治二

六年六月）から交換会の記事を抜き出してみると、次のようになる（日付下の書肆名は会主）。

明治二五年 二月一〇日 出雲寺文次郎

二月一二日 村上（勘兵衛か）

二月一五日 丁子屋九郎右衛門

二月二五日 丁子屋九郎右衛門

二月二六日 丁子屋七兵衛

三月 八日 山城屋佐兵衛

九月 六日 丁子屋七兵衛

九月二一日 丁子屋九郎右衛門

九月二六日 丁子屋九郎右衛門

一〇月 六日 （不明）

明治二六年 一月二五日 下村卯之助

二月二二日 下村卯之助

『明細帳』における交換会記事は、各書籍標題右横に小さく「辰十月六日交換会席 丁九ヨリ買入」とあるだけなので、たとえば明治二五年二月一〇日から一五日の交換会が一回の交換会なのかどうかまでは判然としない。したがって会期日程や会主の順番などについても、同様の理由に抛り不明である。また、明治二五年四月から八月のあいだに

も交換会はおこなわれていたと考えるべきなのだろうが、『明細帳』には記されていない。出席しなかったのか、それとも記入漏れなのか、これまた理由は不明である。交換会じたいの出発点も判然としないが、京都書籍商組合の設立が明治三十三年のことなので、おそらく設立後まもなく始まっているかと思われる。なお、先ほどの引用文中にみえる「祇園牡丹畑」とは料亭のことらしく、⁽¹⁴⁾明治二十六年一月二五日・二月二日の交換会場としてその名がみえる。明治二十五年九月六日開催の交換会は「泉竹席」で行われたようだが、これもまた料亭なのだろう。そのほかの交換会場は不明である。

さて交換会の実際に就いてみると、いずれの交換会でも文栄堂は仏書を交換／入手している。当初から仏書専門の交換会であったようだ。たとえば明治二十五年九月六日開催の交換会に、文栄堂が提示した交換本は以下の五点だった。

『説教故事因縁集』	五部
『往生要集』薄様	五部
『五惡実験録』	一〇部
『安心精密弁』	五部
『往生要集勸導弁』	五部
『説教譬喩弁』表紙付	五部

右五点のうち、薄様『往生要集』は未見。『五惡実験録』は、明治二十一年一月刊『五惡段因果実験録』のことだろうか。いずれも文栄堂蔵版書籍である。これをもとに交換／入手した書籍が、以下の二六点である。

『八宗綱要啓蒙録』	丁七	二〇部	買入
『沙石集』	丁七	二〇部	交換
『近世大家仏教演説』	丁七	一〇部	交換
『冠導俱舎論』		一〇部	買入
『三帖和讃講述』	丁七	五部	買入
『末代無智講義』	丁七	五部	交換
『釈尊一代記』銅版		一〇部	買入
『唯識論述記』	永田	三部	買入
『冠註五教草』	永田	五部	入
『正信偈略釈』		三〇部	買入
『惠澄大師御伝記勸誘録』	丁九	五部	買入
『三部経』丁九版、白紙	丁九	二〇部	買入
『三部経』黄紙	丁九	二〇部	買入
『三部経』大形、片カナ付	丁九	一〇部	買入
『阿弥陀経』大形、片カナ付	丁九	一〇部	買入
『三部経』小形、片カナ付		一〇部	買入

提示した交換本五点三五部は、『沙石集』二〇部、『近世大家仏教演説』一〇部、『末代無智講義』五部と交換され

た。それ以外はすべて「買入」である。たんに「入」とあるのも「買入」と同義か。ちなみに明治二六年一月二五日開催の交換会（於祇園牡丹畑、会主下村卯之助）では、『善光寺図会』四五部、『開山一代記』『蓮如上人御一代記』『増補科註原人論』各四〇部をはじめ、計四四六部の書籍を交換本として提出している。おそらく会場の料亭に持って行ったのは見本の一部だけで、実際に交換／買い入れをしたのは閉会後であったかと思われる。

2・3 預かり売り

前掲『明細帳』乙号の分類項目に「仏書預物」がある。棚卸しの時点では九三点確認されているが、本節ではこの項目について検証する。

「預物」とは文字どおりの意味で、いわゆる「預け売り／預かり売り」と呼ばれる商習慣のことである。まずは、その内訳から。

【書肆】興教書院（33）、顕道書院（21）、共益義会（14）、教育課（6）、垣沼甚七（3）、丁子屋九郎右衛門・永田支店・鹿田静七・吉岡平助・興文堂（1）

【著者】加藤恵證（7）、佐々木黙阿・楠潜龍・英立雲・矢鳴豊丸・伊藤俊道・大友乗恭・平松理英・東寺柳井・和多田専心（1）

括弧内の数字は預かり点数で、書肆では興教書院の三三点が最も多い。預かる部数については幅があり、興教書院『顕正活論』一部、顕道書院『末代無智御文説教』二部などが少数の例として挙げられる。この対極に佐々木

黙阿『七祖類文旁通』二二一部があるが、大部預かりはこの一例のみで、伊藤俊道『説教階梯』・英立雲『仏陀之金言』が三五部、共益義会『日本一』八号・九号が三〇部とつづき、一〇から二〇部というのがもっとも多いようである。

この預かり売りは、著者や書肆から書籍を預かっているわけだから、仕入れに費用がかからないというメリットがある。すべてを捌ききる必要もなく、売れなければ戻せばいいのである。たとえば『御裁断法話』は、明治二五年一〇月に顕道書院から五部預かっているが、翌月にそのまま五部戻している。おそらくこれは、一ヶ月と期間を決めて預かり売りをしている例かと思われる。あるいは大友乗恭『起信論講述』は、明治二五年九月に一九部預かっているが、うち五部を本家の永田長左衛門に回している。こうしたばあいにも、諸費用はかかっていないのだろう。預かり本を買い入れることもあったらしく、楠潜龍『大経貫綜録』は明治二五年八月に三部預かり。翌月一二日に三〇部受け取り、合計三三部を一二円で買い入れ、「活版版洋本ノ部」に編入している。

共益義会から預かった一四点のうちの二三点は『日本一』という真宗系の説教雑誌で、一一号をのぞく一号から一四号までを預かっている。残りの一点は『寺院明細録』で、明治二五年一〇月刊『真宗両本願寺末派寺院明細録大全』のこと。この『明細録大全』の刊記には「寺院明細録並ニ日本一雑誌大売捌書肆」が一八肆列記されているが、そのなかに「五条通高倉東へ入 沢田友五郎」とある。『寺院明細録』にしても『日本一』にしても、文栄堂は預かり売りをしているわけで、刊記に記された売り弘め書肆のすべてが当該書籍を「買い取り」で仕入れているわけではないようである。

預け主の取り分について、たとえば明治二四年七月に刊行された興教書院版『仏教青年活演説』は定価六銭。『明細帳』には「活演説 セメ 二部」と記載されているが、この「セメ」（四銭）が預け主の取り分になるのであろう。

これに対して文栄堂は「テメ」と「ウメ」、すなわち五銭から六銭で売っており、その差額が文栄堂の取り分となる。預け主には翌月、あるいは翌々月あたりに支払うことになっており、各記事の上に「巳四払」「午六払」などの朱印が押捺されている。ちなみに、当初は二部だけだった『仏教青年活演説』だが、明治二六年四月に一〇部、明治二九年には五部預かっており、年に三部前後ほどの需要があったようだ。

買い取りと預かり売りの境界線について、『明細帳』は何も語らない。預かり点数の多い興教書院や顕道書院は明治二三年頃から、共益義会は明治二五年から活動が確認できるように、比較的つきあいの短い書肆である。こうした事情が「買い取り」ではなく「預かり売り」という方法を選択させたのだろうか。あるいは単純に、売れそうだが売れなさそうだという基準に拠るのだろうか。なお、文栄堂の預け売りの記録は『明細帳』にはみあたらないが、『明細帳』甲二号から立項される「戻り本之部」には、こうした預け売りから戻ってきた書籍群が記されているものと思しい。

3 卸し

本節では、文栄堂の卸し状況について考察する。ただし文栄堂流通網の全貌を提示するだけのデータと紙幅がないため、本節では二、三の例をもって仏書の卸し状況を分析しておきたいと思う。

まずは実用書の例として『在家勤行集』をみていく。同書にはかなりの需要があったようで、文栄堂はほぼ毎月、五〇部から一〇〇部ほど刷りたてている。その取り引き相手のほとんどは本屋だが、なかでも目につくのは鹿児島県の吉田幸兵衛で、毎年一〇〇部ほど卸している。おなじく熊本の新村正五郎、岩手の木津屋藤兵衛にも毎年五〇部ほど

卸しているが、彼らに共通するのは、真宗の盛んな土地に所在する本屋であるということだろう。同様の傾向は、『正信偈』や『和讃』などの実用書においても指摘できる。吉田幸兵衛や西村正五郎のほかに散見されるのは、越後新潟の樋口屋小左衛門、加賀大聖寺の金松伊三郎。陸中岩手では、上述の木津屋のほかに、小田嶋佐吉、郡司万七が名を連ねるが、この両名の素性は不明である。ちなみに、近八郎右衛門（金沢）刊行の『在家勤行集』などは古本屋でよくみかける書籍だが、おそらくこの近八が北陸一帯の真宗実用書を取り仕切っていたものと思われる。教義研究書はともかく、近八が実用書の卸し記録にまったく姿をみせないのも、この地域に文栄堂の入り込む余地がなかったためであろう。近八よりは規模の小さい金松伊三郎（大聖寺）との取り引きが盛んなのも、近八の手垢がついていないところへの流通をもくろんだことかもしれない。もっとも卸部数が多くても一〇部前後というのは、逆に近八流通網の規模を物語っているように思えるのだけだ。

また前稿で取り上げた説教学全書の卸し先も、真宗地域が主たるものであった。明治二六年九月刊の説教学全書第一編『勸導薄照』は、出雲寺文治郎、丁子屋九郎右衛門、山城屋佐兵衛、興教書院との相合で出版された勸化本。一〇〇部作製なので、文栄堂の取り分は二〇〇部。出雲寺からの買入れ分一〇部を足した二一〇部を完全に売り捌いたのは、明治二七年七月のこと。同書を卸した本屋を列記してみると、次のようになる（括弧内の数字は卸部数）。

其中堂（愛知、25） 森江佐七（東京、15） 金松伊三郎（石川、13）、木津屋藤兵衛（岩手、10） 松本善助（大阪、5） 前岡久五郎（和歌山、5）、西村正五郎（熊本、5） 吉田幸兵衛（鹿児島、5） 小田嶋佐吉（岩手、3）、安達幾太郎（島根、3） 伊藤清九郎（東京、2） 梅津寿平（大分、2）、近八郎右衛門（石川、1） 頭道書院（大阪、1） 辛島並家（大分、1）

相合書肆をみれば明らかのように、必ずしも真宗に特化した説教本というわけではないが、粟津義圭述の勸化本という性格からなのだろうか、岩手、石川、愛知に鹿児島など、真宗地域に所在する本屋が並んでいる。

さて、こうした実用書の類に対して、より専門的な研究書はどうだろうか。『増補原人論』は、明田嘉七との相合で明治一〇年に刊行した仏書。記録に拠れば、法泉寺（大阪）、地藏寺（香川）、出石寺（愛媛）に各一部ずつ卸している。他に、同記録には安覚寺・山田寺の名が記されているが、いまのところ所在等を明らかにしえないでいる。個人名としては、斉藤智隆、小林常阿、高井元良、玉置明延といった名前がみられるが、名前からすると寺僧だろうか。また、常陸中学校、備前中学校、淡路中学校にも一部から三部卸している。本屋では、森江佐七（東京、80）、梶田勘助（愛知、20）、永田支店（京都、10）、前岡久五郎（和歌山、10）、河合卯之助（京都、9）といった名前が並んでいる（括弧内の数字は卸部数）。このような研究書のばあい、地域も本屋も真宗にこだわることなく、他宗派の寺院や本屋と取り引きしているのが特徴であろう。たとえば上述の法泉寺の宗派は真宗大谷派だが、地藏寺と出石寺は真言宗御室派の寺院。文栄堂は真言宗とのパイプも多々持っていたらしく、たとえば明治二二年二月刊『冠導真言名目』は山城屋佐兵衛より出版された仏書で、真言宗の名目二〇題に関する注釈書。流通先には前述の出石寺に加え、高野寺、総持院、宝山寺といった真言宗寺院が並んでいるし、そもそも山城屋じしん、真言宗を柱とした仏書屋である。

既述のように、仏書の安定した需要を提供しているのは教義經典の普遍性であり、実用書のような大量供給を可能にしているのは膨大な数にのぼる真宗信徒たちであろう。けれども、この二点を根っこで支えているのは、こうした真宗地域に張り巡らされた網の目なのである。文栄堂の営業基盤となっていたのは、真宗関係書とおして作り上げ

られていった流通網なのであった。

おわりに

仏書屋とひとくちにいつても、ひとつの宗派だけを取り扱うわけではなく、いろんな宗派の書籍を取り扱う本屋がほとんどである。そのなかで中心となる宗派をそれぞれ有しているわけで、たとえば真宗本派と永田文昌堂や興教書院、真言宗と山城屋（藤井文政堂）、日蓮宗と村上平樂寺のごとくである。そして文栄堂にとっては真宗大谷派であり、とりわけ実用書の類が主力商品であった。その流通の網は此方彼方に張り巡らされているが、本稿で全貌を明らかにしたわけではない。そのためには、『明細帳』に記された取引相手の素性を明らかにする作業が残っている。

実は、『明細帳』に名前は頻出するけれど本屋としての活動が確認できないし素性も不明、という人物はたくさんいる。仏書、とくに実用書のばあい、本屋や寺院のほかに仏具屋なども流通に関わっていたはずであり、そうした人物が『明細帳』に記されている可能性は大である。一例を挙げておこう。前述の説教学全書第一編『勸導薄照』の卸し先に名がみえた、紀州の前岡久五郎。彼は、高野山の門前に店を構えていた土産物屋だったとい⁽¹⁵⁾う。前岡の出版物に高野山絵図が多いのも、土産物屋という性格をよく物語っているよう。前述の、陸中岩手に所在した小田嶋佐吉や郡司万七、あるいは越中富山の宮本幸助なども素性不明の人物だが、彼らも前岡とおなじように土産物屋だったり、あるいは仏具屋だったりするのかもしれない。こうした可能性も含めて、文栄堂流通網の全体像の解明は次の課題としたい。

〔注〕

- (1) 『日本出版史料』第一〇号、日本出版学会・出版教育研究所共編、日本エディタースクール出版部発行、二〇〇五年一月。
- (2) 鈴木俊幸「仕入印と符牒」(『紀要』文学科八五号〈通卷一八〇号〉、中央大学文学部、二〇〇〇年二月)が、書籍に残された仕入印や符牒記事をもとにして如上の問題を論じている。けれども、すべてに押捺されているわけではない仕入印から実態を論じるためには膨大な数の書籍に目を通さねばならないなど、問題は多い。
- (3) 浅岡邦雄「明治期出版社の所得税額」、『総合ジャーナリズム研究』第一八〇号、東京社、二〇〇二年四月。
- (4) 日本全国商工人名録発行所編纂、明治三二年二月再版。京都府「書籍商及新聞雑誌」の項、ろノ五七頁。この項目には一六肆列記されているのだが、うち「朝日新聞京都支局／太田権七」は「新聞雑誌商」であるため、考察の対象からはずすことにした。
- (5) 京都出版史編纂委員会編『京都出版史 明治元年―昭和二十年』、京都出版史刊行会、一九九一年、六二七頁。
- (6) 西村七兵衛(法蔵館五代目)「老舗出版社の歩みから見る近代京都の出版史」、『図書館きょうと』第四〇号、京都府立図書館、二〇〇三年一月。
- (7) 安野一之氏の御教示に拠る。
- (8) 銅版草双紙の史的展開については、拙稿「銅版草双紙考」(『近世文芸』第七五号、日本近世文学会、二〇〇二年一月)を銅版草双紙刊行書日については拙稿「銅版草双紙書目年表稿(上)」(『教育・研究』第一五号、中央大学附属高等学校、二〇〇一年二月)および「銅版草双紙書目年表稿(下)」(『中央大学大学院 論究』(文学研究科篇)第三四号、中央大学大学院、二〇〇二年三月)を参照がたい。
- (9) 『日本出版史料』第九号、日本出版学会・出版教育研究所共編、日本エディタースクール出版部発行、二〇〇四年五月。
- (10) 浄土宗学校松山支校志水海運宛「(教科書採用御願書)」、『新版彫刻控』所収。京都支校予備科ではすでに採用している旨が記されている。
- (11) 「入銀帳」記載の記事「今般^東本山教育課蔵版書籍売捌仕候間……」(年記なし)に拠る。
- (12) 浅岡邦雄「同盟医書販売組合」設立文書に関する「考察」、『日本出版史料』第九号、日本出版学会・出版教育研究所共編、日本エディタースクール出版部発行、二〇〇四年五月。

(13) 西村明編『仏教書出版三六〇年』、法蔵館、一九七八年、一九頁。

(14) 西村七兵衛氏の御教示に拠る。

(15) 藤井聲舟氏（藤井文政堂）の御教示に拠る。ちなみに前岡久五郎の所付は、「紀伊国伊都郡高野村大字高野山」三五番地」（明治三年八月刊『声明集』刊記）となっている。

【付記】 調査に際してご高配を賜った京都大学附属図書館に深謝申し上げます。なお本稿は、平成一九年度特別研究員奨励費による研究成果の一部である。